

日本の地方大学のグローバル化プロセスに関する研究

教授言語を英語とした授業の実施状況を中心として

王鏡洲

はじめに

英語は世界で最も広く使用されている言語である。近年、非英語圏諸国における高等教育のグローバル化を推進するために、言語系科目以外の科目においても英語を教授言語とすることが有効な手段となっている。日本においてもグローバル化の進展に対応するために、教授言語を英語とした授業が増えてきている。

筆者は、学士課程では英語を専門として学習をおこない、教授言語を英語とした授業を多く経験した。その中で、教授言語を英語とした授業の効果および学習者や授業者のフィードバックについて関心を持つようになった。現在、筆者が通っている地方大学においても、グローバル化人材育成を重視し、教授言語を英語とした授業が実践されている。本研究は、そのような授業が学習者の英語学習に対する態度と英語コミュニケーション能力にどのような影響を与えるのかを明らかにすることを試みる。

研究目的

本研究の目的は、教授言語を英語とした授業が学習者に与える影響や検討すべき点を調査によって明らかにすることである。さらに、その結果をもとに今後の大学における教授言語を英語とした授業のあり方について考察する。

教授言語を英語とした授業について

教授言語を英語とした授業は、教科内容を英語で教える授業と英語で教える英語の授業が含まれていると考えられる。このような授業に対して、① 授業内容と英語を同時に学ぶことができる、② 授業における英語の使用量が増える、③ 学習者が英語使用に対する抵抗感が減る、という3つのメリットが存在していると考えられる。一方、このような授業は、① 教員に高度な英語力が求められる、② 理解できない学習者が学習意欲をなくす、③ 受験への対応が困難という3つのデメリットも存在しているのではないかと考えられる。

先行研究

梅田（2020）は教授言語を英語とした授業の実施を大学、教員、学生3つの立場から分析している。

大学側：

- ① 規模や立地環境にかかわらず、大学の授業運営において、英語使用が当たり前になりつつある。
- ② 海外からの留学生をより多く受け入れ、国際的な評価を高めることにもつながる。

教員側：

- ① グローバル化の進む社会で活躍する人材育成の一方策として、教員が英語を用いて講義を行うことは意義がある。
- ② 英語による授業ができるか否かで、教員に対する評価が大きく異なってくる可能性がある。
- ③ 英語での実施にそぐわない科目があることも事実である、全ての授業を英語で行う必要があるとは思えない。

学生側：

英語力の不足に伴い、学生自身が英語による授業内容を理解できなかった場合、実施する意味が失われてしまうことになると指摘している。そして3つの解決策が提唱されている。

- ① 日英両言語による当該授業用の専門用語集を作成・配布。
- ② 授業の初期段階では日本語による説明を多くし、回数を重ねる毎に英語による講義の割合を増やす。
- ③ 学生の専門領域が決まる3年次の演習における英語授業の実施。

Kim（2008）は教授言語を英語とした授業の実施によって授業者と受講者がどのようなメリットを得られたのを明らかにするため、授業者と受講者にアンケート調査を行った。その結果、授業者は自分の英語力と専門的な知識力が上昇し、受講者は英語と接触する機会の増加に伴い英語における聴解力、

会話力が上昇したと報告している。

アンケート調査

教授言語を英語とした授業の受講によって学生がどのような影響を受けるのかを明らかにするため、筆者が所属する大学の生命倫理審査から許可を得た上で「大学における英語学習及び教授言語を英語とした授業に対する態度」に関するアンケート調査を行った。アンケートは以下の3つの項目に分けた。

- i. 英語力及び英語学習に関する質問
- ii. 大学で受講している英語授業に関する質問
- iii. 教授言語を英語とした授業に関する質問

回答状況

1、2、3年生合計131人に紙ベースアンケートを配布した。回答者は100人であり、回答率76.34%であった。

グループの分け方

調査参加者の英語力に基づき、以下の基準でグループ分けを行った。英語力に関する回答は、調査参加者による自己申告とした。

CEFR	英検等のレベル	備考
	英検4級 (TOEIC® 300未満) レベルかそれより低い	初歩的な語句や簡単な定型表現であれば使うことができる。
A1	英検3級 (TOEIC® 300-399) レベル	たどたどしいが、簡単な自己紹介や身近なことが話せる。
A2	英検準2級 (TOEIC® 400-539) レベル	少したどたどしいが、日常生活で簡単な用を足したり、興味・関心のあることについて自分の考えが言える。
B1	英検2級 (TOEIC® 540-729) レベル	日常生活での出来事について、あまり言いよどむことなく説明したり、用件を伝えたりすることができる。
B2	英検準1級 (TOEIC® 730以上) レベルかそれ以上	社会性の高い話題について、説明したり、自分の意見を述べたりすることができる。

調査結果

英語力

調査参加者の英語力は、1年生、2、3年生いずれにしてもB1レベルの割合が最も高いという結果になった。更に2、3年生においてB2レベルの割合が1年生と比べて増加していることが分かった。調査参加者が所属する学部では、学年の進行に伴って英語力の上昇がもたらされていることが確認できる。

英語学習において難しい項目

英語学習において文法 (Grammar)、単語 (Vocabulary)、会話 (Speaking)、作文 (Writing)、読解 (Reading)、聴解 (Listening) という6つの項目から、最も難しい項目を選択してもらった。その結果、いずれのグループにしても会話 (Speaking) を選択した回答者の割合が最も高いことが明らかになった。これは筆者の母国である中国とは異なっている。中国では多くの学習者が最も難しい学習項目は文法であると考えている。日本と中国の英語教育の現状、それぞれの利点と問題点の考察については今後の検討課題とする。

最も望ましい英語授業

調査参加者の系統結果から、最も望ましい英語授業は学生の英語力によって違いがあつて、英語力が

高い学習者ほど、教員が授業で英語をたくさん使用することを求めていることが明らかになった。しかし、2、3年生で B2 レベルの英語力が持つ調査参加者の中で授業中に日本語の使用も望んでいる学生の割合も高いと見られた。それはある程度の英語力を持つ学生にとって英語力を更に伸ばすため、母語の説明を通して精緻な知識を身につけたいのではないかと考えている。

日本人または英語母語話者の教員から受講したい項目

回答結果から、日本語母語話者の教員から最も受講したい項目は文法 (Grammar)、英語母語話者の教員からは会話 (Speaking) であることが明らかになった。「日本語母語話者の教員が文法を教えればわかりやすい」「英語母語話者の教員が会話を教えればネイティブのような英語を身につける」と思っている学生が多いと推察できる。

教授言語を英語とした授業の受講意欲

調査参加者の英語力が高いほど、教授言語を英語とした授業の受講意欲が高くなるとわかった。英語力が高くなるに従い、学習者の英語に対する抵抗感が軽減され、授業内で英語が使われるという状況を受け入れやすくなると考えられる。

教授言語を英語とした授業の受講が英語学習に与える影響 (2、3年生)

教授言語を英語とした授業の受講が英語学習に与える影響を「更に英語学習を好きになった」、「更に英語学習に嫌いになった」、「変化なし」に分けて教授言語を英語とした授業を受講した 2、3年生に選択するように指示した。その結果、いずれのレベルの調査参加者においても「更に英語学習を好きになった」を選択した割合が最も高かった。それは教授言語を英語とした授業の受講が調査参加者の英語学習にポジティブな影響を与えられたのではないかと考える。一方、「変化なし」と選択した B2 レベルの調査参加者も何名かいた。困って既に高い英語力を持つ学生には短時間の受講によって変化しにくい、あるいは自分からその変化を意識しにくいのではないかと考えられる。

今後の課題

1. アンケート調査の二、三年生の回答者を対象に教授言語を英語とした授業の受講からどのような影響を受けたのかについてインタビュー調査を行う。
2. 来年度の二年生 (現在の一年生) を対象に二回目のアンケート調査を行い、現在のデータと比較する。教授言語を英語とした授業を受講することによってどのような変化を起したのかを明らかにする。

参考文献

- Kim, S. (2002). Teachers' perceptions about teaching English through English. *English Teaching*, Vol. 57, No. 1, 131-148.
- Kim, S. (2008). Five years of teaching English through English: Responses from teachers and prospects for learners. *English Teaching*, Vol. 63, No. 1, 51-70.
- 池田周. (2004). 「EFL 教室における「教授言語」の選択に関する理論的考察」『ことばと文化』, 7, 139-155.
- 梅田肇. (2020). 「研究報告: 大学での英語による授業実施: その有用性と問題点」『平安女学院大学研究年報』 第 20 号, 87-93.
- 表昭浩, 川上綾子. (2021). 「英語授業の教授言語: 過去 30 年の日本語使用と英語使用の傾向」『鳴門教育大学学校教育研究紀要』, 第 35 号, 121-129.
- 大藪加奈. (2007). 「「英語で教える英語の授業」: 非母語話者教員をとりまく状況分析と理論的枠組み」 *Forum of Language Instructors*, Vol. 1, 26-36.
- 浦上典江. (2000). 「コミュニケーションのための英語教育 (2) 言語 5 要素統合教授法」『中国短期大学紀要』, 31, 207-224.
- 笹島茂. (2011). 『CLIL 新しい発想の授業: 理科や歴史を外国語で教える!?!』 東京: 三修社.
- 花見楨子. (2012). 「ブレインストーミング「英語で授業する / しない」」『三重大学国際交流センター紀要』, 第 7 号, 93-107.
- 多国恵実 (2003). 「大学における英語による授業の可能性」 *Journal of Aomori Public College*, 8(2), 12-19.